

新潮・現代世界の文学

眠りの帝国

H=フレデリック・ブラン

石井啓子 訳



L'EMPIRE DU SOMMEIL

Henri-Frédéric Blanc

SHINCHOSHA

新潮・現代世界の文学

眠りの帝国

H=フレデリック・ブラン

石井啓子 訳

江苏工业学院图书馆
藏书章

新潮社



Henri-Frédéric BLANC : L'EMPIRE DU SOMMEIL

© Actes Sud, 1989

This book is published in Japan by arrangement with
les Editions Actes Sud,
through le Bureau des Copyrights Français, Tokyo.

ねむ ていこく
眠りの帝国

アンリ = フレデリック・ブラン

いし いけい こ
石井啓子訳

発 行 1997.7.30

発行者 佐藤隆信

発行所 株式会社新潮社 郵便番号162/東京都新宿区矢来町71/振替00140-5-808

電話：編集部 (03) 3266-5411

読者係 (03) 3266-5111

印刷所 株式会社光邦

製本所 加藤製本株式会社

© Keiko Ishii 1997, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-527002-8 C0397

価格はカバーに表示してあります。

眠りの帝国
L'EMPIRE DU SOMMEIL

第一部

ジョゼフはひんやりとした空気を胸いっぱい吸いこんだ。どこかの教会の鐘が十一時を告げた。いや、ひよつとすると十二時だったかもしれない。ちょうどそのとき、十月の満月が黄色い雲の切れ間から姿をあらわした。人通りの絶えた街の片隅では、淡い街灯の光が、ごみの山を照らしだしている。酔っ払いのわめき声が都会の夜の底に響く。ジョゼフは掃き集められた枯れ葉の山の前で足を止めると、その中から綺麗なのを一枚、猫へのみやげに選り出し、診察鞆の中にした。また雨が降りだしていた。こういうときにかぎって、どこかに傘を置き忘れてきたあとなのだ。彼は足早にメトロの入口に向かった。

プラットホームで電車を待つあいだ、彼は今しがた終えてきたばかりの往診のことを思い出していた。《きょうのおばさんは今までの中でも最悪だったな》彼は心の中でつぶやくのだった。

《眠れないのでどうしても来てください、そう自分のほうから頼んでおきながら、ぼくの姿を見るやいなや、こんどは眠りたくないばかりに罵詈雑言の限りを尽くして、言いたい放題だ……。よし、こんどというこんどは、決心したぞ。往診なんて金輪際やめだ、やめだ。眠りのお出まし、が少々遅れたといつては、たちまち恐慌をきたす輩、こちらの迷惑なんぞいっさいおかまいなし、おのれの悪夢を延々と語りたがる輩、どこが悪いのか、ただちに診断を下してもらわねば気がす

まず、平気で医者を脅迫してくる輩、睡眠薬をひと盛りしてくれと言って譲らぬ輩……。そんな連中ばかりだ。あらゆる毛色のノイローゼ患者相手に、おとぎ話の砂売りおじさんよろしく、人を眠りにつかせる役回りを演じるのには、もういい加減うんざりだ。そもそもの信じちゃいないやつは、こちらの言うことには、はじめっから耳を傾ける気もないんだし、そうでないやつは、ぼくのことを救い主かなんかと勘違いして、こちらの言うことを、ただただ鵜呑みにするだけ……。どう考えても、これからは精神科医の時代だ……。》

電車が来ていた。ジョゼフは、他にはひとりも乗客のいない車両に乗ると、席に腰を下ろし、全身の力をこめた大あくびをし、気持ちよさそうに大きく伸びをした。もうすぐ自分のベッドにもどれる、そう思うだけでしあわせだった。

次の駅で四人の若者が同じ車両に乗りこんできた。男がひとり、あとの三人は女だ。おそらく仮装パーティーかなにかの帰りなのだろう。顔にしろいを塗りたくり、ぼさぼさの髪型で、真っ赤な口紅をつけた娘たちは、パンク調の魔女といったいでたちだ。黒いストッキングはあちこち伝線して穴があき、ところどころ、輝くばかりの素肌があらわになっている。鋏を打った草のブルゾンの下には、どうやらなにも身に着けていないらしい。男のほうは、悪魔に扮装していた。小さな山羊鬚をくつつけ、真っ赤なマントを羽織り、先の尖った尻尾をくつつけている。これがまた信じられないくらい、いい男なのだ。女の子たちのうけを狙って、おどけた百面相をはじめたかと思うと、この男、女の子たちの耳元でなにやら囁いたり、ブルゾンの下に手を滑らせてくすぐってみたり……。そのあいだも、娘たちは男の尻尾をおもちゃにしたりして、とにかく楽しくてしかたがないといった様子なのだ。

自分たちに目を奪われているジョゼフのことなど、四人ともまったく眼中にないようだ。ああ、

もし今、あの青年にとつてかわれるものなら、もし今、二十歳若返れるものなら、ジョゼフはなにを失おうとも、これっぽっちも惜しいとは思わないだろう！ あの娘たちといっしょに踊つて、あの娘たちの首をそつと噛んで、あの娘たちの、むせるような体臭に酔いしれ、あの娘たちの波打つ髪にこの顔を埋めることができるのなら、今の仕事のすべて、研究のすべてをもさつさと火にくべてしまつたつてかまわない……。本当は、連中よりジョゼフのほうが青年の名にふさわしいのだ。くる夜もくる夜も、ジョゼフは、研究と思索を重ねてきた。目を悪くするのも厭わず、何ページも、何ページも、ただひたすらなにごとかを書き連ね、ひたすら脳細胞を穿つてきた。必ずや脳細胞のどこかに黄金を発見できることを信じて……。で、その結果はどうだ。目下のところ彼の唯一の夢は、これ以上はもうなにも考えたくはない、というその一事に尽きるのだった。動物のようにひたすらおのれの人生を享受したい、ただそれだけ……。そう、もつと警戒してかかるべきだった。知性は後戻りがきかない。意識も取り消し不可能なのだから。未知なるものを学ぶ力はだれにでもある。しかし、いったん知つてしまつたことを忘れることは、だれにも許されないのだ。不老不死の靈藥、アンブロシアをその頭脳の中に探し求めているあいだに、彼の人生は澱んで腐つたスープのような味わいしくもたなくなつていた。思考は、また次なる思考へとジョゼフを導いてきたにすぎない。なにかを学べば、またそれだけ新たな疑いが積み重なつてきただけなのだ。

ジョゼフは思つた。《臆病者、それがこのほくの正体さ。書物を開くことは生きることよりずっとたやすい。古本の上に身を屈めているだけなら、なにも危険を冒さずにすむ。自分こそが王様だと威張つていられる。しかし正しいのは、じつは、彼らのほうなのだ。彼らは笑つて、楽しんでる。人生とはなんぞや、そんなことを自問するまでもなく、彼らは現に生きているのだから

ら……」

ジョゼフは、若者たちに見とれていた。彼らの潑刺とした様子、若猫のような生命力に、すっかり心を奪われていた。それに比べて自分の体重は数トンもあるような気がするのだった。

突然、若者が叫んだ。

「ここには、だれもいないのかい？ 悪魔としては、観客のひとりも欲しいところなのだが……。おおつ、だれかいるじゃないか。多少とも人間らしいのがひとり……」

男はすぐそばまでやってくると、ジョゼフにその天使のような顔を向けた。黒い瞳がきらきら輝いている。

「いくらだい？」

男はたずねた。

「いくらって、なにがかな？」

ジョゼフは突然の質問に面喰らって、こう答えた。

「あんたの魂、いくらだい？」

ジョゼフはにっこり笑った。

「悪いけれど、ぼくの魂を君に譲ってあげるわけにはいかないよ」

ジョゼフは答えた。

「だいいち、ぼくの魂だったって、どこにあるのかもさだかではないのだから」

「べつに、譲ってくれとは言つてやしないよ」

若者は応じた。

「ただ、ぼくの手で取り出させてくれれば、それでいいんだ。あんたの魂、あんまり役に立つて

いるようにも見えないしね」

「ははっ！ もらってもらったところで、そっちだつて迷惑なだけだと思うがね」

「使い古しの、しなびた魂。おまけに自分で自分のことをこれっぽっちも信じちゃいない魂。そんなもの、ほんとうに、なんの値打ちもないだろうに。魂の代金として、そうだな……カラーテレビを一台さし上げるっていうのは、どうだろう？ それではお気に召さないかい？ 余生を過ごすのにはおあつらえ向きだと思うけれど……」

「あいにくテレビは見ない主義でね」

ジョゼフは答えた。

「ああ。それじゃだめだな……。そうか。それじゃあ、ええつと……芝刈り機と交換でつていうのはどうかな？ 日曜日には役立つと思うよ……」

「庭がないんだよ」

「……じゃあ、冷凍庫はどうだ？ 冷凍庫つてやつは、じつに便利なものだよ！ 冷凍しておくものなら、いつだつてなにかあるはずだし……」

娘たちは、くつくつと笑い転げている。ジョゼフも笑いをこらえきれなくなった。

「それが、台所に冷凍庫を置くだけのスペースがないんだな」

ジョゼフは答えた。

「それじゃあ、なんだったらいんだい？」

若者は山羊鬚をなでつけながらたずねた。

「あんだ、いったい何者なの？」

「ぼくは、医者だよ。というか、研究者かな。そうだね、研究者といったほうがいい。なにせ大

半の時間を研究に費やしているのだから。なにをかうと……」

「研究者！　そうか、おれさまとしたことが、もっと早く気づくべきだったな。そういや、あんた、いかにも頭を絞ってますよっていう顔をしてるね。そうか、研究か……。賭けてもいいけど、先生は、いまだお探しのものを見つけないはいたっておらない、ね、図星だろ……。？　おっととと！　学者先生がたにたいしては、どうして、こう意地悪くなっちゃうんだらう。先生がたがいてくださらなければ、地獄もお先真つ暗だつていうのに。ご存知のように、昔は誤った考えを広めるために、十字架だの領主旗だの抱えてあつちこちまわらなければならず、それはそれは骨の折れる仕事だった。それが今日では、技術の発達のおかげで嘘そのものが、はるかに立派なものになったし、科学の発達のおかげで嘘の広まるスピードもめざましいものとなった。おまけに、進歩のおかげであらゆるところに、くまなく広まっていつてくれるときている！　……そうだ、研究者先生、あんたがお探しのものとやらをばくが見つけてあげるっていうのは、どうだろう？　それと交換に、あんたの魂を譲ってくれば、あとはなにもいらぬから。さあ、どうする？　よし、取引き成立だ！」

言うがはやいか、この男、みごとな手際で車内広告の銀行のポスターを一枚ひき剝がすと、ポットから万年筆をとり出し、ポスターの裏面につきのような一文を書き綴った。

私こと、下記署名者は、私所有の魂を、この世の王たる、大山羊氏に委譲することを誓う。代価として、前記の者は、私の研究の完全なる成功を保証するものとする。

「ほら、どうだい？」

若者は続けた。

「いかにも契約書らしい契約書を作ってあげたよ。あとは、あんたがこの下にサインしてくれば、それで完了だ」

娘たちが、大口を開けて笑い転げている中、男はジョゼフに紙と万年筆を差し出した。ジョゼフは、時代遅れの人間だと思われたくはなかったので、言われるままに署名をした。

「グラツイエ・モルト！」

若者は紙と万年筆をすばやくとりかえすと、固唾をのんで自分に注目してくれている娘たちのところに揚々と引き上げていった。

「ほらね！」

若者は言った。

「ちよろいもんだ！ まったく、やつらときたら、御しやすくなるいっぽうだぜ。そのうち、署名させて下さいっていう人間が列をなすようになるんじゃないだろうか。前だったら、たったひとりの人間を落とすのにだって、うんと早起きをして、夜明け前に家を出なきゃならなかったっていうのに。今じゃあ、変装する必要さえないんだから！ もっとも、こんな話を黄泉ラバ・アンバの国でしてみたところで、おそらくだれも信じちゃくれないだろうけどね！」

ジョゼフは思った。《ユーモアの精神に溢れ、陰にこもることのない若者たちと出会うことができるのは、じつに喜ばしいことだ》

そろそろ、タンプル駅に着こうとしていた。ジョゼフが乗降扉を開けると、若者が声をかけてよこした。

「おやすみなさい、研究者先生！ あんまり深く考えこんでばかりいると、穴に落っこちてしま

いますよ！」

娘たちの笑い声ははじけるのを背に、ジョゼフは電車を降りていった。地下鉄がふたたび動き出すと、ジョゼフはうしろを振り返った。次第に遠ざかりつつある電車の中から、あの若者が、さも悲しいといった風を装い、手で自分の尻尾を振りながら別れを告げていた。

雨は小降りになりつつあった。ジョゼフはもう眠くはなかった。どちらかといえばしゃきつとした気分だ。あの若者たちに出会ったおかげで、ジョゼフにも少しばかり活力が甦ってきていたのだ。ぴよんぴよんと跳び回りたい、そう思ったのだが、あやうく犬の糞の上にひっくりかえりそうになった。

住居のある建物の扉の前に来ると、ジョゼフは袖口で銅製の表札板をぴかぴかに磨いてみせた。

医学博士、ジョゼフ・カヴァルカンティ
不眠症ならびに睡眠障害専門

しかるのち、重い扉を押して中に入ると、慢性的に猫の小便の臭いのたちこめる階段を上がっていった。ジョゼフの住まいは、建物の最上階——四階にある。一階の電球しかついていないので、いつものことながら、階段の最後のほうは手探りで上らなくてはならない。

部屋の戸を開け、玄関の明りをつけた。レインコートを脱ぎながら、ジョゼフは、このつぎ天気が良くなったら、こんどこそかならずクリーニングに出そうと固く心に誓いつつ、とりあえずは、そのコートを、虫に喰われていつ壊れてもおかしくなさそうなコート掛けに、用心しながら、

そつと掛けた。

リヴィングストーンが、埃にまみれて古色蒼然としたジュール・ヴェルヌの『驚異の旅行』全集の上に、さも気持ちよさそうに鎮座ましましてゐる。リヴィングストーンというのは、ジョゼフの飼っている由緒正しきドラ猫の名前だ。猫は大袈裟すぎるほどの身振りで大あくびをすると、絨毯の上に跳び下り、飼い主の脚の横すれすれのところを通つて台所に向かった。けつして事を急かすというのではないのだが、有無を言わせぬ態度である。ジョゼフは、あとについて台所に行き、猫専用の小鉢にミルクを注いでやると、自分もコーヒーを一杯飲むことにした。またしても、なにかを書きたいという願望が甦つてきていたのだ。

数分後、コーヒーカップを片手に、ジョゼフは書庫の中を大股に歩き回つてゐた。この部屋は書庫であると同時に、寝室の役目も果たしており、ジョゼフ本人は「夢想場」と称してゐた。窓が二箇所あり、いずれも重い緋色のカーテンがかかつてゐる。一方の窓は表通りに、もう片方は建物の中庭に面してゐる。猫の爪跡が条になつて残つた大きな革の肘掛け椅子の横には、ジョゼフの仕事机が置かれてゐた。桎の木でできた古いテーブルなのだが、その上には本やら書類やらが山と積まれ、プロンズでできたナポレオンの胸像と、写真立てがひとつ飾られてゐる。すでに黄ばんだその写真には、戦車の前に立つ、兵役時代のジョゼフの姿があつた。

部屋の反対側、つまり、表通りに面したほうの窓と、鏡のついた筆筒とのあいだには、ジョゼフの「仕事ベッド」が置いてある。赤い羽根布団がかかつており、黒人のお面が数点、クリストファー・コロンブスの巨大な肖像画の周りをぐるりと取り囲んで、このベッドを見下ろすように飾られていた。

どこもかしこも、本また本の山だった。歳月と同じく、いつのまにか積もりに積もつたもので

ある。

猫は、ペロペロと舌なめずりしながら戻つてくると、古ぼけた書物の迷路のど真ん中に陣取つて、身繕いを始めた。ジョゼフは診察鞆から例の枯れ葉を取り出すと、猫のほうに投げてやった。猫は長い時間をかけて、用心深く匂いを嗅いでいたが、どうやら大丈夫らしいと確信を得るや、枯れ葉に飛びかかり、狂気ばしった目をきよろきよろさせながら、猛然と、枯れ葉を細かくちぎりにかかった。

電話が鳴つた。レジェからだつた。司書をやっているこの男、気難しく、熱狂的なところのある人物だが、ジョゼフとは、何年か前に古書の競売の折に知り合つて以来、たがいに気脈を通じる間柄になつていた。

「なんていい夜なんだ！　偉大なる夢狩人にして彗星撃墜人である、わが友よ！　起こしちまつたわけじゃないだろう？　こちらも、君の宵っぱりは、先刻承知の上だからね……」

「じつを言えば」

ジョゼフは答えた。

「そろそろ仕事にかかろうかと、ちようど思つていたところ……」

「それで、例の君の論文、『眠り大全』のほうは、はかどつているかい？」

「ああ、あれ……あんなもの書いて、いつたいなんの役に立つんだろうかと思うとね……」

「そりゃ、君、なんの役にも立ちやしないさ、なんにもね。しかしだ、ヒマラヤだつて役に立たないという点では同じさ。しかしながら、頂上からの眺めは、とてつもなくすばらしいぞ！　なんの役に立つのかなどと自問すること自体が、すでに、そこいらに蔓延する金儲け主義という、あの下劣にして破壊的な悪循環に足を突っこみかけている証拠じゃないか。真実のために尽くす